

青年の職業行動に関する研究

A Study of Vocational Behavior for Adolescent

森 下 高 治

今日、青年は多様化、複雑化する社会の中で、自己の将来の進路の選択、また、職業の選択決定をはからなければならない。

高学歴化する社会にあって、一方では大学進学率の頭打ち現象があらわれはじめ、一部の高校生にとっては、専門学校などで技術教育を受け、職業の世界に入ろうとするものもいる。

もちろん、職業、進路の選択は、本人による選択決定でなければならないが、なかには親や教師の意見に大きく影響されることが多い。また、卒業時の社会・経済的状况などによっても青年は敏感に反応を示す。しかし、一般に言われるように、今日の青年は、のんびり楽しく暮らしたいと考える反面、一方に強くやりがいのある仕事を求めている。

このようなことから、やりがいのある仕事・職業を青年が求めるには、当然、自分の志向や適性に即した職業選択の問題がより重要な課題となる。

特に、職業選択、適応についての心理学的な理論としては、特性要因理論、発達理論、サイコダイナミック理論、一般理論、意志決定理論などがある。

本研究では、一般理論の範ちゅうに入るホランド (Holland, J. L.) の類型学的理論 (Typological Theory) にもとづく研究をおこなおうとする。

そこで、ホランドの理論について述べる。

ホランドの考え方は、「類は友をよぶ」ということわざで表わすことができるように、同じ職業、同じ仕事に携わっている人間には共通したパーソナリティがあるものととらえている点にある。このパーソナリティについては、人は類似性により、いくつかのタイプに分類できるとしている。その場合、現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的の6つのパーソナリティが考えられる。一方、同じように、職業(環境)の方もパーソナリティにうまく対応できる6領域がある。

ホランドの理論が成立するためには次の4つの仮説がある。

1. 人は、類似性によって、6つのパーソナリティ・タイプのいずれかに特徴づけることができる。それは、前述の現実的～慣習的の6つのタイプである。

2. 人が生活している環境は、同じく6つの環境モデルに特徴づけることができる。

現実的・研究的・芸術的・社会的・企業的・慣習的環境の6つである。

3. 人は自己の技能や能力を発揮できる環境を求め、また、彼らの態度や価値観が表現できる環境を求め、例えば、現実的タイプは現実的環境（職業・仕事）を求め。

4. 人の行動は、個人のパーソナリティと環境との相互作用によって決定される。

次に、6つのパーソナリティ・タイプの特徴とそれに対する職業分野を述べる。

現実的—Realistic—：このタイプの人は、攻撃的行動、運動共応と技術を要する活動を楽しむ。抽象的なものよりも具体的な問題を扱うことを好む。また、できるだけ、言語による表現や対人的な技術を要求する事態をさける。例) 機械工、現場技術者、運転手

研究的—Investigative—：この種のタイプの人は、行動するより考えをまとめることを好む。具体性に対する抽象性を持ちあわせ、分析的である。例) 研究者、医師

芸術的—Artistic—：このタイプは、人との接触は間接的で、芸術面での自己表現を通して、環境的な問題に対処することを好む。例) 音楽家、作家、通訳

社会的—Social—：このタイプは、教えたり、面倒をみたり、世話をする役割を好む。また、言語的技術と対人接触技術を持ちあわせている。例) 教員、カウンセラー

企業的—Enterprise—：このクラスの人たちは、他の人を指導・監督したり、ものを売ったりする場合、巧みな言語的技術を用いて人をひきつける。例) 事業経営者、プロデューサー、セールスマン

慣習的—Conventional—：このタイプの人は型にはまった言語的活動や算数的、あるいは数による計算活動に好みを示す。例) 会計士、銀行員、事務員

ホランド（1973）が述べているように、職業の選択は、自己のパーソナリティ・タイプに対応する環境を志向してなされるのである。

わが国においては、広井・返田両氏がホランド理論にもとづく研究を1970年に行なっている。広井氏らは、パーソナリティ・タイプと希望職業について、学生を対象に調査を実施し、パーソナリティ・タイプと環境モデルの間には、希望職業を通して関連性があることを見い出している。

また、森下（1977）も、ホランドの SDS を用い女子を対象とする研究で、看護婦、保育者、一般事務職志望の3群間のパーソナリティ・タイプと環境モデルとの関係を明らかにした。さらに、職業選択の一つの要因である職業に対する興味や自信には、男女間、専攻別に差異があることが言われているが、道脇氏（1972）は職業レディネス・テストを用いた研究をおこない、職業興味や職業に対する自信度には、性差による違いがあることを認めている。

専攻による差異は、松本氏（1974）、柳井氏（1967）がそれぞれまとめているが、その中で、理科系の学生は科学技術的な関心が強く文科系の学生は対人接触的な興味が強いのを明らかにしている。

本研究では、諸氏の研究を踏まえて、ホランド理論にもとづき青年の職業選択行動を次の3点から明らかにしようとする。

1). 高校生、大学生を各対象別に、SDS の総合得点からみた場合、或いは職業興味、活動性、能力の可能性などの下位尺度からみた場合、男女間で差異があるかどうか。

2). 男女を別にして、高校生の場合は学科別、大学生は学部により、SDS パターンの違いがみられるかどうか。

3). 志望職業によって、パーソナリティ・タイプに特徴がみられるか、例えば、男子の教員志望群は6つのパーソナリティ・タイプのどの領域に特色があるかどうか。

また、高校生と大学生の比較で、発達のな変化がみられるかどうか。

方 法

調査対象及び調査時期) 高校生は、SDS を昭和53年2月～7月の期間に6つの調査対象校*で実施した。そのうち、兵庫県立F高等学校は、1年生275名、2年生240名を対象とするが、他は全て2年生が調査の対象学年である。分析者数は、tab.

1 に示すように、男子877名、女子665名、計1542名である。

一方、大学生(短期大学、専門学校を含む)の調査対象校は10校**で、高校生と同様、昭和53年1月～6月にかけてSDS 調査票を実施した。

分析対象者は tab. 2 の通り、男子1042名、女子745名、計1787名である。対象のうち女子については、ばらつきがあるため、経済学部、商学部、経営学部をまとめて、経営学部(N=44)とした。また、

Table. 1 男女別調査対象者内訳
(高校生)

	男 子	女 子
普通科	449	284
農業科	178	113
工業科	231	—
商業科	19	191
被服科	—	38
保育科	—	39
計	877	665

Table. 2 男女別調査対象者内訳
(大学生)

	人 数	
	男 子	女 子
文学部	76	202
社会学部	75	53
経済学部	102	12
法学部	60	19
商学部	88	6
外国語学部	23	23
経営学部	184	26
理学部	53	11
工学部	304	2
農学部	67	—
音楽学部	7	70
神学部	3	—
短大	—	202
専門学校	—	119
計	1042	745

*高等学校は、大阪府立A高等学校(普通科)、大阪府にある私立B高等学校(普通科)、大阪府立C工業高等学校(工業科)、大阪府立D商業高等学校(商業科)、兵庫県立E農業高等学校(農業科)、それに兵庫県立F高等学校(普通科、被服科、保育科)の計6校である。

** 大学は、兵庫県内にある私立A大学を主として、その他、大阪府にある公立B大学、同じく私立C大学、D大学、E大学、それに東京都内の私立F大学の計6大学を対象とする。また、短期大学は、兵庫県内にある私立G短期大学と大阪府にある私立H短期大学、専門学校は兵庫県内にあるI及びJの2つの国立病院付属看護学校が対象校である。

理学部、工学部をまとめて、理工学部として取り上げることにした。

なお、本文で用いる文科系学部は、文学部、社会学部、経済学部、法学部、商学部、経営学部を指し、理科系学部は、理学部、工学部、農学部を言う。実施方法は、高校生は主として、HR 時間をあて、大学生は講義時間を用いて実施したが、実施上、問題となることはなかった。

調査内容) ホランダの SDS 調査票を用いた。SDS は、仕事に関する活動性の好み、仕事に対する能力の可能性—いずれも11項目×6領域、職業に関する好み—14項目×6領域、能力についての自己評価—6領域の7段階からなる順位づけ2種の計5つの側面による設問からなる。

スコアリングは、能力の自己評価を除き、全て○印をつけた個数を1点として算出した。従って、活動性と能力の可能性は、最高11点から最低0点の範囲にある。職業に関する好みは、14点から0点の範囲に、また、自己評価は各順位づけにおける段階点をそのまま得点として算出した。

総合得点は、各尺度で得点から高いもの順に第3位までコード化(領域でもって示す)し、全ての尺度を通じ第1位にある各領域の個数を数え、それに各領域ごと3倍を乗じた。以下、第2位は2倍、第3位は1倍とし、総計したものである。このようにして求めたものが、個人の6領域における総合得点である。

さらに、個人の総合コードは、総合得点として算出されたものを得点が高いものから順に第3位までをコード化したものがこれにあたる。例として、ある個人の総合得点が、現実的(R)10、研究的(I)14、芸術的(A)5、社会的(S)0、企業的(E)3、慣習的(C)1とすると、総合コードは、IRA となる。

SDS 調査票は総合得点を求めるための5つの側面からなる設問と他に、第1～第3までの志望職業を尋ねる質問を設けている。志望職業については、本研究では第1志望のみを取り上げることにする。

結果と考察

1. SDS 結果の男女差の問題

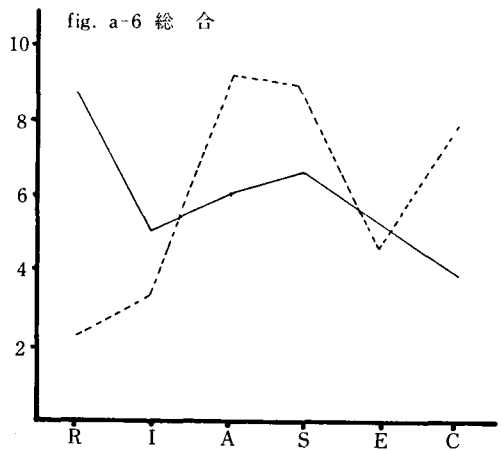
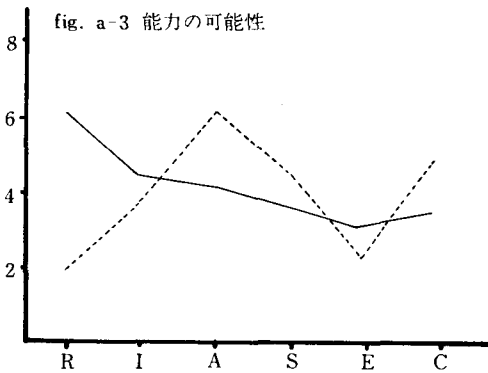
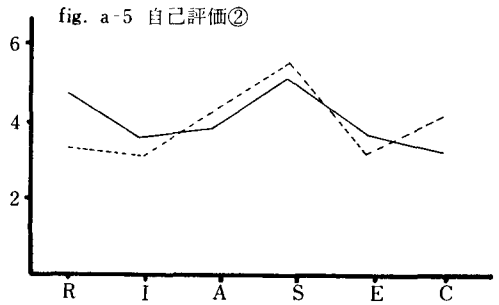
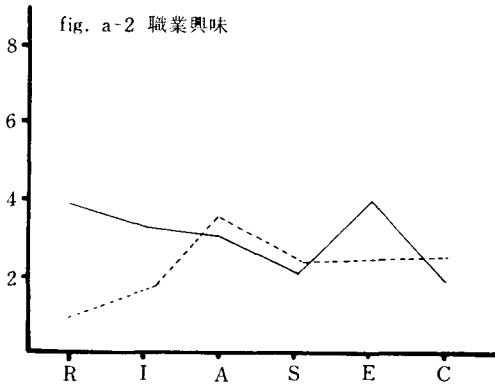
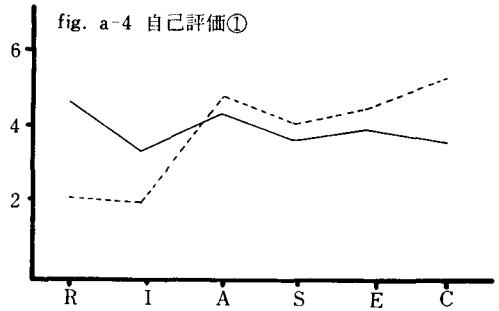
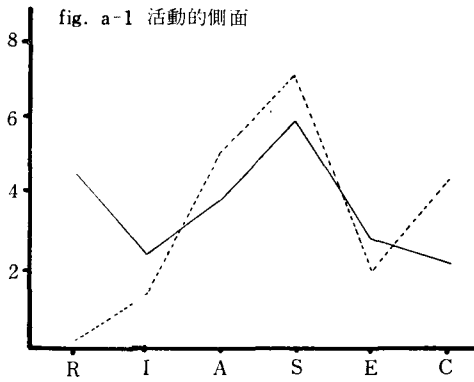
まず、高校生、大学生ともに、SDS の下位尺度得点並びに総合得点の平均値と標準偏差を算出*した。

高校生による SDS 総合得点の男女別平均値と2群間の検定結果は、tab.3 — a に示す。同様に大学生は tab.3 — b に示す。図は fig. a, fig. b に示す通りである。総合得点による結果(t 検定)は、高校生、大学生とも、男子が現実的、研究的、企業的領域で女子より有意に得

*集計にあたり電子計算機処理は、関西学院大学情報処理研究センター FACOM 230-38 によった。

青年の職業行動に関する研究

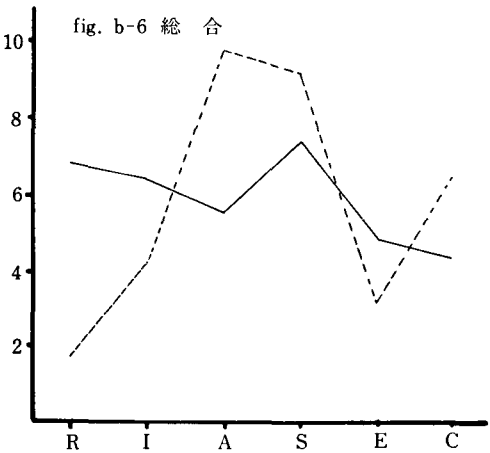
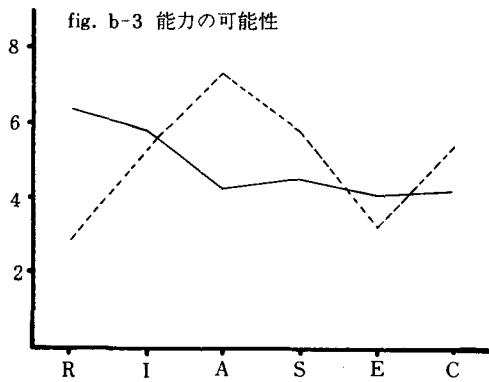
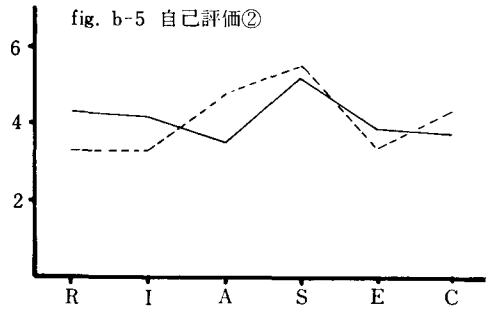
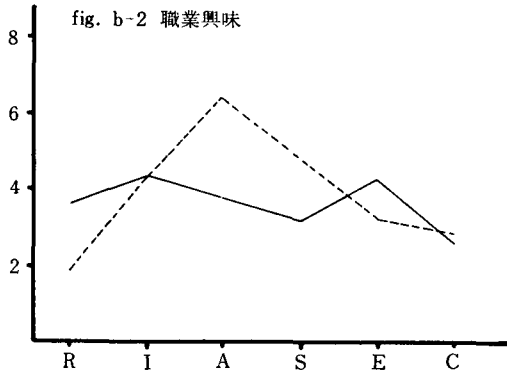
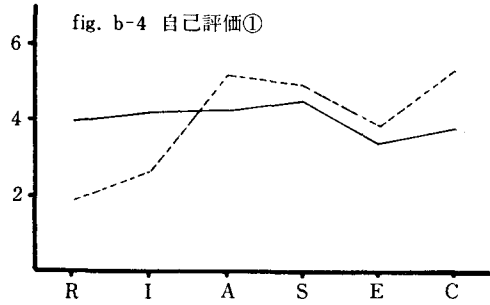
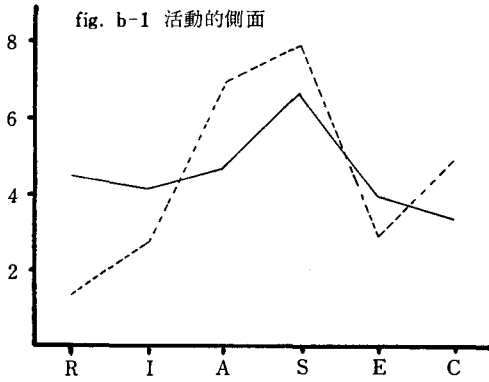
Figure a. 高校生 SDS プロフィール



— 男子 (N=877)
 - - - 女子 (N=665)

青年の職業行動に関する研究

[Figure b. 大学生 SDS プロフィール



— 男子 (N=1042)
 女子 (N=745)

青年の職業行動に関する研究

Table 3-a-(1) 仕事に関する活動的側面

(高校生)

*P<.05 **P<0.01 ***P<.001

	現 実 的		研 究 的		芸 術 的		社 会 的		企 業 的		慣 習 的	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男 子	4.7	2.71	2.6	2.47	3.9	2.57	6.0	2.49	2.9	2.48	2.3	2.15
女 子	0.8	1.30	1.5	1.79	5.2	2.60	7.3	2.21	2.0	2.01	4.4	2.68
t 値	*** 34.12		*** 9.75		*** 9.81		*** 10.62		*** 8.28		*** 16.40	

Table 3-a-(2) 職業に関する好み

	現 実 的		研 究 的		芸 術 的		社 会 的		企 業 的		慣 習 的	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男 子	3.9	2.86	3.2	3.03	3.1	3.12	2.0	2.41	4.0	2.95	1.9	2.51
女 子	0.9	1.32	1.5	2.29	3.5	3.46	2.3	2.35	2.4	2.08	2.6	2.35
t 値	*** 24.67		*** 12.32		* 2.39		* 2.47		*** 12.14		*** 6.08	

Table 3-a-(3) 仕事に対する自己の能力の可能性

	現 実 的		研 究 的		芸 術 的		社 会 的		企 業 的		慣 習 的	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男 子	6.0	2.69	4.3	2.70	4.1	2.86	3.6	2.68	3.0	2.56	3.4	2.37
女 子	1.9	1.85	3.6	2.20	6.1	2.75	4.5	2.64	2.2	1.98	4.7	2.60
t 値	*** 34.43		*** 5.81		*** 13.70		*** 6.09		*** 6.23		*** 9.80	

Table 3-a-(4) 能力についての自己評価①

	機 械 に 関 する 能 力		科 学 的 能 力		芸 術 的 能 力		教 える 事 物 の 能 力		営 業 販 売 の 能 力		文 章 を 早 く 書 く 能 力	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男 子	4.7	1.84	3.4	1.85	4.4	1.81	3.7	1.52	4.0	1.86	3.6	1.88
女 子	2.1	1.15	2.0	1.13	4.8	1.48	4.1	1.26	4.5	1.52	5.3	1.30
t 値	*** 32.31		*** 17.26		*** 4.76		*** 5.32		*** 5.91		*** 19.41	

Table 3-a-(5) 能力についての自己評価②

	手 腕 の 技 術		数 理 的 能 力		音 楽 的 能 力		協 調 的 な 能 力		管 理 技 術 の 能 力		事 務 能 力	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男 子	4.8	1.82	3.6	1.84	3.8	1.91	5.1	1.46	3.7	1.54	3.2	1.64
女 子	3.4	1.89	3.1	1.69	4.4	1.76	5.5	1.29	3.2	1.44	4.2	1.62
t 値	*** 15.00		*** 5.72		*** 6.18		*** 4.36		*** 6.52		*** 10.96	

Table 3-a-(6) 総 合

	現 実 的		研 究 的		芸 術 的		社 会 的		企 業 的		慣 習 的	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男 子	8.8	4.09	5.1	3.58	6.2	3.90	6.7	2.96	5.2	3.10	3.9	3.09
女 子	2.3	2.15	3.3	2.51	9.1	3.34	8.8	2.69	4.5	2.53	7.9	3.57
t 値	*** 37.53		*** 11.40		*** 15.26		*** 14.37		*** 4.26		*** 23.94	

青年の職業行動に関する研究

Table 3-b-(1) 仕事に関する活動的側面

(大学生)

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

	現実的		研究的		芸術的		社会的		企業的		慣習的	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男子	4.5	3.08	4.1	2.78	4.8	2.82	6.7	2.38	3.9	2.93	3.3	2.52
女子	1.4	1.66	2.7	2.36	6.9	2.52	7.9	1.94	2.9	2.58	4.9	2.87
t 値	*** 25.28		*** 10.81		*** 16.33		*** 10.66		*** 7.51		*** 12.31	

Table 3-b-(2) 職業に関する好み

	現実的		研究的		芸術的		社会的		企業的		慣習的	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男子	3.6	3.01	4.3	3.41	3.8	3.62	3.1	3.15	4.2	3.26	2.6	2.87
女子	1.9	2.04	4.3	3.53	6.3	4.24	4.7	3.20	3.2	2.55	2.8	2.54
t 値	*** 13.38		0.23		*** 13.31		*** 10.79		*** 6.87		* 2.04	

Table 3-b-(3) 仕事に対する自己の能力の可能性

	現実的		研究的		芸術的		社会的		企業的		慣習的	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男子	6.4	2.79	5.8	3.00	4.3	2.99	4.6	2.96	4.0	2.91	4.2	2.38
女子	2.8	2.19	5.3	2.26	7.3	2.77	5.7	2.85	3.2	2.24	5.3	2.46
t 値	*** 29.79		*** 3.95		*** 21.65		*** 7.88		*** 5.92		*** 9.05	

Table 3-b-(4) 能力についての自己評価①

	機械に関する能力		科学的な能力		芸術的能力		教えること の能力		営業販売の 能力		文章を早く 書く能力	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男子	4.0	1.99	4.2	1.88	4.2	1.83	4.5	1.58	3.4	1.82	3.8	1.88
女子	1.9	1.02	2.6	1.40	5.1	1.51	4.9	1.23	3.8	1.51	5.2	1.41
t 値	*** 26.44		*** 19.17		*** 10.12		*** 5.40		*** 4.65		*** 17.81	

Table 3-b-(5) 能力についての自己評価②

	手腕の技術		数理的な能力		音楽的能力		協調的な能力		管理技術の能力		事務能力	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男子	4.3	1.93	4.1	1.90	3.5	1.87	5.2	1.46	3.8	1.60	3.7	1.77
女子	3.3	1.80	3.2	1.74	4.8	1.71	5.5	1.26	3.3	1.52	4.3	1.59
t 値	*** 11.01		*** 9.50		*** 14.64		*** 4.62		*** 6.52		*** 7.93	

Table 3-b-(6) 総 合

	現実的		研究的		芸術的		社会的		企業的		慣習的	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男子	6.9	4.67	6.4	4.10	5.6	4.11	7.4	3.63	4.8	3.39	4.3	3.84
女子	1.7	1.91	4.2	2.91	9.7	3.71	9.2	2.94	3.2	2.50	6.5	3.58
t 値	*** 28.63		*** 12.75		*** 21.81		*** 11.10		*** 10.92		*** 12.69	

点が高く、反対に、芸術的、社会的、慣習的領域は女子が高い得点を示している。

次に、下位尺度における高校生の6領域、30の下位尺度結果は、能力の自己評価1（ものを売る能力—企業的）のみ、女子が有意に高いが、その他は総合得点における男女の差異と全く同じ結果がみられた。

大学生の6領域、30の下位尺度結果は、職業に関する好みの研究的領域が、男女による有意な差異は認められなかった。また、能力の自己評価1（ものを売る能力）は、女子が男子より有意で得点が高いことが明らかになったが、残り28の下位尺度結果は、総合得点結果と同様、男子が現実的、研究的、企業的に優れ、女子が芸術的、社会的、慣習的領域に特徴がみられた。

これら結果から、SDS 結果の性差の違いを認めることができる。

そこで、次に性差がみられる領域を考察すると、男子は、いわゆる男子向きの仕事（機械を扱う仕事、人をまとめたり、監督したりする仕事、営業販売の仕事）を中心とするものであり、それが現実的、研究的、企業的の3領域に反映されている。

一方、女子の領域も、女子向きの仕事（人との対人接触、芸術的な仕事、決められた仕事をする、事務的な仕事）を中心としている。これら結果は、仕事が男子向きか、女子向きかを個人個人が認識することによって、男女間に興味や能力、技術あるいは職業志向上の差が生じるのではないかと思われる。

下位尺度のうちで、女子が営業販売の能力（自己評価1）が高くなっているが、これは他の企業的領域の結果と矛盾している。

前述の分析で触れたように、この場合の営業販売の能力は、“ものを売る能力”で、百貨店、個人商店の店員などの販売能力であり、そのような認識のもとで評価がなされたものと考えられる。結果全般については、道脇氏（1972）の研究結果とほぼ一致している。すなわち、男子は、機械・技術、研究・管理の仕事に対する興味、自信が強く、女子は対人・サービス、事務作業の仕事に対する興味、自信が強い。

また、高校生と大学生との比較で、高校生においても大学生と同じ領域に差異が認められることは、既に、仕事・職業に関する男性的、女性的役割を含んだ活動性、能力的側面の発達の分化が高校段階（15～17才）で進んでいることを意味している。

2-a 高校生の学科別 SDS 結果の検討

男子の場合、4学科が対象となるが、ここでは総合得点を中心に取り上げ、普通科を軸に考察する。tab. 4, fig. c にみられるように現実的領域において、農業科、工業科は普通科より高い得点を示す。また、研究的領域は、逆に、普通科が他の3学科より高く、しかも最も得点が高いことが認められた。さらに、慣習的領域は普通科より、商業科が有意に高く、商業科の特徴を表わしている。

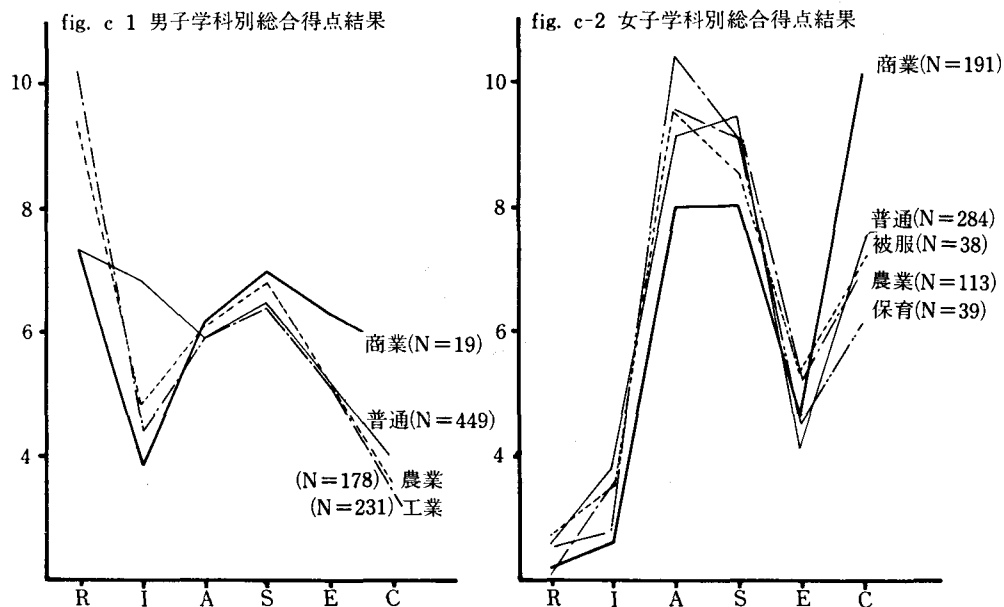
4学科のうち、工業科は現実的領域において、農業科と比較しても差異があることから、工業科としての強い特徴を示す。下位尺度を含めると、普通科と農業科、普通科と工業科との比較の方が、普通科と商業科より大きな差異がみられる。特に、能力の自己評価1のものを売る能力（企業的）は、普通科が最も低く、他の学科との間に全て差異がみられた。

一方、5学科の女子の結果は tab. 5、fig. c に示すが、総合において、男子と同様、普通科を軸に差異を検討した結果、普通科は商業科との間に大きな違いがみられた。特に、現実的領域を除き、他の全ての領域にわたり差異が認められ、企業的、慣習的の2種類は商業科の方が得点が高いのに比し、研究的、芸術的、社会的領域は普通科の方が高い。

また、企業的領域は、デパート販売係の志望が示すように、農業、被服科の方が、普通科より優れていることが明らかになった。

各学科の特徴として、保育科は、芸術的領域にやや特徴がみられ、農業科は社会的領域が、被服、商業各科との比較で差異が大きく高い。全般に、普通、農業、被服、保育にみられる女子の SDS パターンは似かよっている。

Figure c. 高校生学科別総合得点結果プロフィール



青年の職業行動に関する研究

Table 4-1 男子学科別総合得点結果 (高校生)

	R	I	A	S	E	C
普通科	7.3	6.8	5.9	6.5	5.1	3.9
N=449	4.31	4.04	3.91	3.38	3.29	3.10
農業科	9.4	4.8	6.1	6.8	5.3	3.6
N=178	3.81	3.37	3.75	2.84	2.72	2.69
工業科	10.2	4.4	5.9	6.4	5.2	3.6
N=231	3.73	3.11	3.85	2.59	3.21	2.81
商業科	7.3	3.8	6.2	7.0	6.3	5.7
N=19	2.83	3.28	3.62	2.82	3.26	3.80

Table 4-2 総合得点による2群間検定結果 (男子)

< t 値 >

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

	R	I	A	S	E	C
普通科-農業科	5.73***	5.68***	0.60	1.03	0.78	1.11
普通科-工業科	8.61***	7.81***	0.12	0.56	0.57	1.34
普通科-商業科	0.06	3.11**	0.33	0.52	1.52	2.41*
農業科-工業科	2.01*	1.33	0.44	1.62	0.22	0.12
農業科-商業科	2.41*	1.21	0.11	0.16	1.42	3.07**
工業科-商業科	3.34***	0.74	0.29	0.88	1.33	3.07**

Table 5-1 女子学科別総合得点結果 (高校生)

	R	I	A	S	E	C
普通科	2.1	3.5	9.6	9.1	4.1	7.3
N=284	2.10	2.82	3.24	2.73	2.54	3.38
農業科	2.6	3.8	9.1	9.4	5.2	7.0
N=113	2.21	2.25	3.23	2.64	2.67	3.28
商業科	2.2	2.6	8.0	8.0	4.7	10.1
N=191	2.18	2.09	3.36	2.67	2.39	3.11
被服科	2.7	3.5	9.5	8.5	5.3	7.1
N=38	2.10	2.23	2.95	2.37	2.29	3.28
保育科	2.5	2.8	10.4	9.1	4.5	6.1
N=39	2.13	2.17	3.13	1.77	2.24	3.40

R: 現実的 I: 研究的 A: 芸術的
S: 社会的 E: 企業的 C: 慣習的

上段 平均値
下段 標準偏差

青年の職業行動に関する研究

Table 5-2 総合得点による2群間検定結果(女子) <t値>
*P<.05 **P<.1 ***P<.001

	R	I	A	S	E	C
普通科—農業科	1.78	0.97	1.33	1.14	3.94 ^{***}	0.82
普通科—商業科	0.40	3.76 ^{***}	5.35 ^{***}	4.28 ^{***}	2.41 [*]	9.23 ^{***}
普通科—被服科	1.51	0.04	0.14	1.36	2.68 ^{**}	0.36
普通科—保育科	0.98	1.46	1.36	0.05	0.85	2.05 [*]
農業科—商業科	1.31	4.65 ^{***}	2.97 ^{**}	4.51 ^{***}	1.92	8.32 ^{***}
農業科—被服科	0.31	0.64	0.67	2.01 [*]	0.07	0.16
農業科—保育科	0.17	2.34 [*]	2.06 [*]	0.70	1.60	1.42
商業科—被服科	1.21	2.44 [*]	2.67 ^{**}	0.97	1.43	5.44 ^{***}
商業科—保育科	0.71	0.57	4.10 ^{***}	2.47 [*]	0.48	7.21 ^{***}
被服科—保育科	0.40	1.39	1.19	1.36	1.53	1.27

有意差のあるt値の太字は2群間検定で前者が後者より有意で大

” 細字は2群間検定で後者が前者より有意で大

2-b 大学生の所属学部による SDS 結果の検討

高校生と同じように男女を別にし、所属学部による SDS 総合得点結果の違いをみると、男子は tab.6, fig.d にみられるように、いわゆる文科系学部の結果は非常に似かよったパターンを示す。

6領域のなかでは、社会的領域が最も得点が高く、以下、芸術的、或いは企業的がプロットされる。また、現実的領域が全般に低く比較的劣っているのが特徴的である。

一般に文科系向きとされる職業は、対人接触の強い、人間的な暖かさ・愛情、豊かな個性と独創性が必要とされるものが含まれ、社会的、芸術的領域の特徴は、これら内容を表わしている。

しかし、いわゆる理科学部の結果は、文科系と異なったパターンを示し、第一位に研究的、或いは現実的領域がランクされ、社会的領域は第3位に位置づけられる。

次に、女子の結果を tab.7 fig.d に示すが、文学部と社会学部のパターンが極めて似かよっている。すなわち、各尺度とも、社会的、芸術的領域が高く、現実的領域が極めて低いのが目立つ。また、同じ文科系の学部である経営学部は、男子と異なり慣習的領域が第1位にランクされ、女子の特徴を示す。

参考に、理工学部、音楽学部をあげると、音楽学部では、当然のことながら芸術的領域がきわだって高い。総合コードの1stコードの分析で、70名中68名(97.1%)が芸術的領域を占めている。また、理工学部では、研究的領域が6領域のなかで最も高く、現実的、企業的、慣

青年の職業行動に関する研究

Figure d. 大学生学部別総合得点結果プロフィール

fig. d-1 総合 (男子)

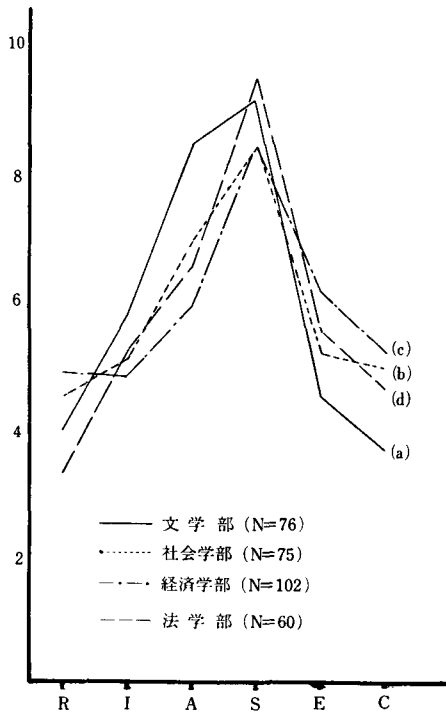


fig. d-2 総合

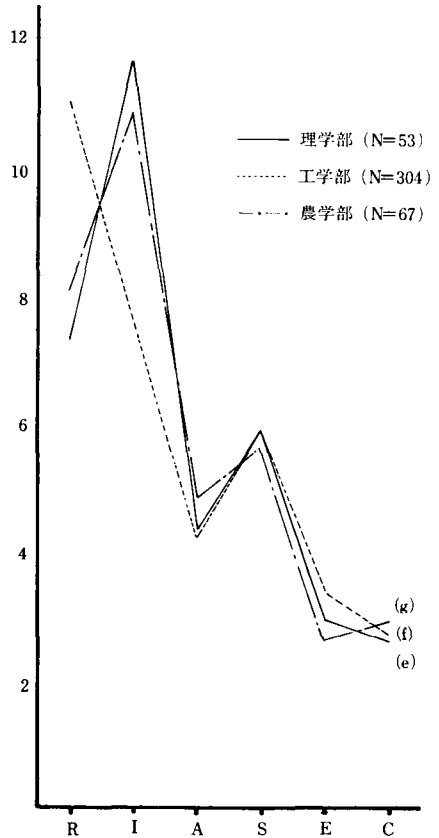


Table 6 男子学部別総合得点結果 (大学生)

	R	I	A	S	E	C
文学部 N=76	4.0 2.89	5.8 3.86	8.4 4.33	9.1 3.85	4.5 3.29	3.7 2.65
社会学部 N=75	4.5 3.61	5.1 3.87	6.9 3.77	8.4 3.57	5.2 3.23	4.9 3.36
経済学部 N=102	3.61 3.75	3.87 3.29	3.77 4.14	3.57 3.28	3.23 3.76	3.36 3.70
法学部 N=60	4.9 3.3	4.8 5.1	5.9 6.5	8.4 9.5	6.1 5.5	5.2 4.7
理学部 N=53	7.4 3.72	11.7 2.96	4.4 3.64	5.9 3.58	3.0 3.07	2.6 2.47
工学部 N=304	11.0 3.79	7.7 3.65	4.2 3.31	5.9 2.99	3.4 2.57	2.6 2.40
農学部 N=67	8.1 3.75	10.9 2.66	4.8 3.59	5.6 3.04	2.6 2.49	2.9 2.67

上段 平均値
下段 標準偏差

青年の職業行動に関する研究

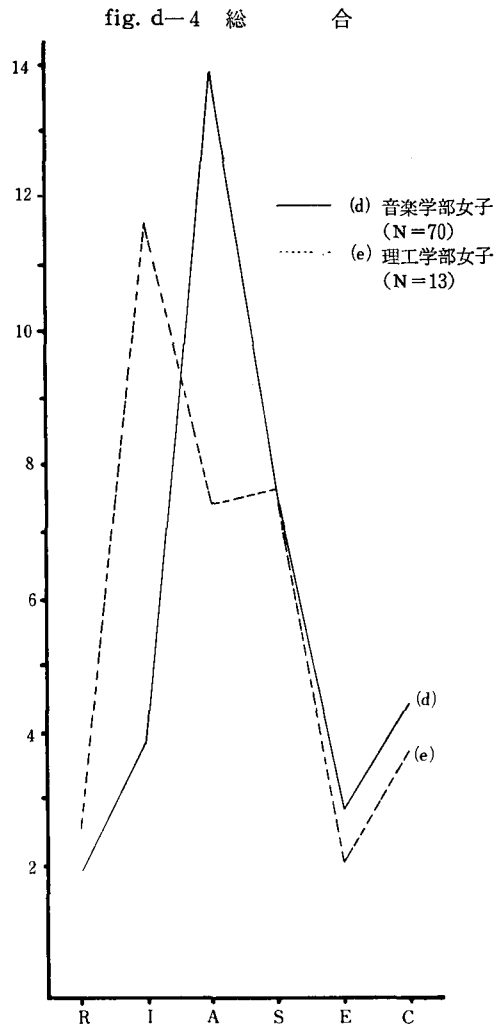
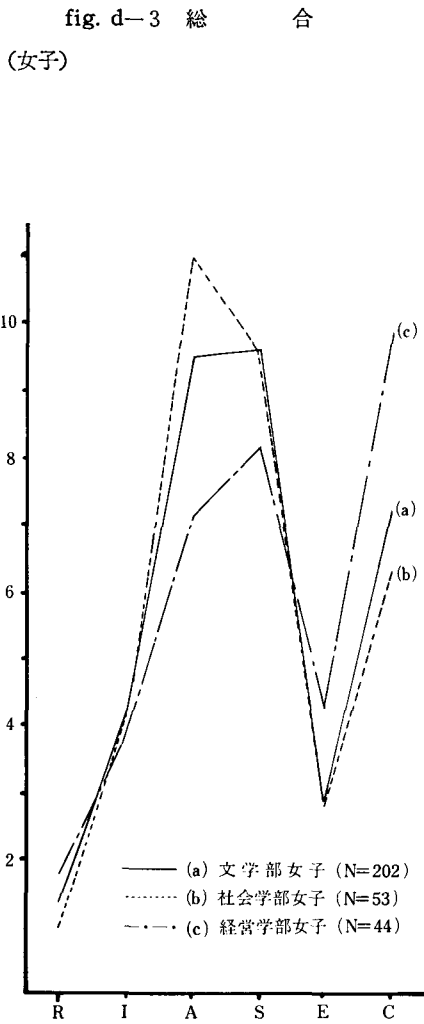


Table 7 女子学部別総合得点結果 (大学生)

	R	I	A	S	E	C
文学部 N=202	1.4	4.1	9.5	9.6	2.9	7.2
社会学部 N=53	1.1	3.8	11.0	9.5	2.8	6.3
経営学部 N=44	1.8	3.8	7.1	8.2	4.3	9.8
音楽学部 N=70	1.9	3.8	13.9	7.6	2.8	4.4
理工学部 N=13	2.6	11.6	7.4	7.6	2.0	3.7

上段 平均値
下段 標準偏差

習的領域は低い。現実的領域については、理科系の男子と異なった傾向を示している。

これら結果から、所属学部による差異、しかも、性差を含んだ違いが明らかになった。

なかでも、理科系は文科系と異なる特有なパターンを示すことが明らかになった。もちろん、文科系でも文学部がやや特徴のあるパターンを示すが、理科系3学部の独自性は、わが国において、理科系の方が専門的職業との結びつきが強く、より具体化しているために、明確な形をしているものと解される。

ホランド自身、ある環境には、その環境に対応するパーソナリティ・タイプの人が集まると言っているが、本研究で検討を加えた所属学部、所属学科もひとつの環境であると考えられるために、これら結果の違いは、ホランド理論を支持するものである。

3. 高校生、大学生の志望職業による分析—男子—

男子のみを分析の対象として、第一志望に機械技術（自動車整備士）、研究開発、教員、営業、経理の5つの職業のいずれかをあげた調査票を抽出し、これら志望職業にみる SDS 総合得点結果を検討した。

高校生は、tab. 8、fig. e に、大学生は tab. 9、10 fig. f に結果を示すが、表からして、高校生の場合、機械技術群は現実的領域に、研究開発群は、現実的、研究的領域に特徴がみられる。また、教員群は社会的、芸術的領域に、営業群は企業的、社会的領域、経理群は、慣習的、社会的領域に特徴がある。

Figure e. 志望職業による総合得点結果
(男子高校生)

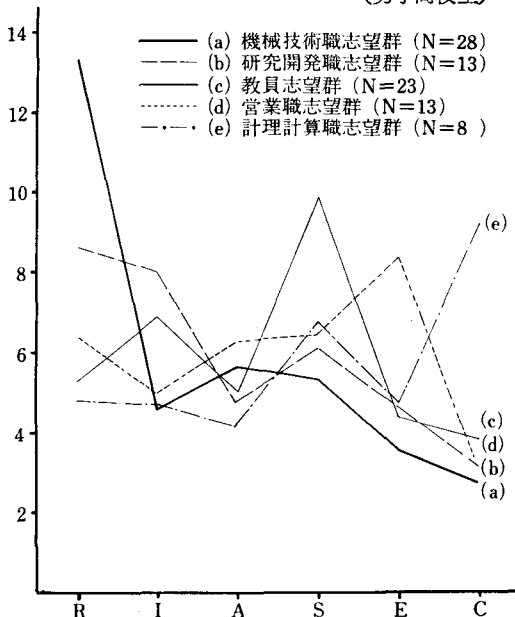
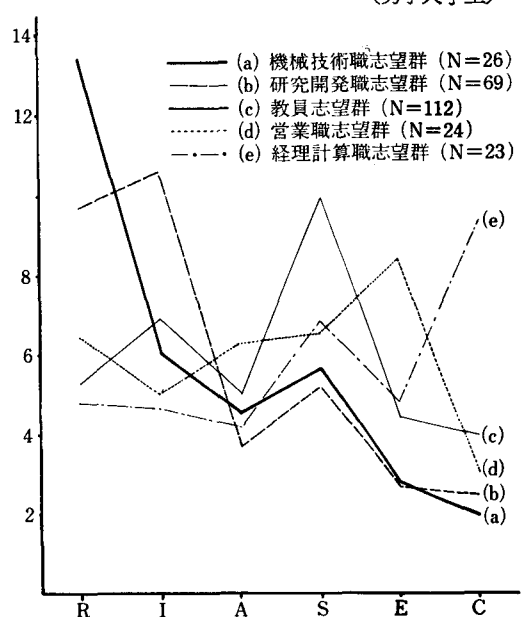


Figure f. 志望職業による総合得点結果
(男子大学生)



青年の職業行動に関する研究

Table 8 志望職業による総合得点結果 (男子高校生)

	機械技術		研究開発		教員		営業		経理	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
現実的	13.3	1.77	8.6	3.85	5.7	3.14	6.7	3.45	5.4	3.64
研究的	4.6	3.10	8.0	4.66	4.6	3.50	2.9	1.38	3.8	2.49
芸術的	5.7	3.34	4.8	2.42	7.2	4.42	4.2	2.97	5.0	3.39
社会的	5.4	2.69	6.1	2.20	10.0	2.46	7.7	1.59	7.4	2.29
企業的	3.6	2.46	4.5	2.41	6.3	2.77	7.8	3.13	6.0	3.54
慣習的	2.8	2.24	3.2	2.45	2.9	3.87	7.0	4.17	8.8	3.93

Table 9 志望職業による総合得点結果 (男子大学生)

	機械技術		研究開発		教員		営業		経理	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
現実的	13.4	1.94	9.7	3.96	5.3	4.09	6.4	4.37	4.8	3.64
研究的	6.0	2.30	10.6	3.16	6.9	4.35	5.0	3.51	4.7	3.12
芸術的	4.5	3.49	3.7	3.12	5.0	3.46	6.3	4.26	4.2	3.41
社会的	5.7	2.77	5.2	2.85	9.9	3.24	6.5	3.38	6.8	2.34
企業的	2.8	1.62	2.7	2.17	4.4	3.49	8.4	3.34	4.8	2.45
慣習的	2.0	1.53	2.5	2.40	3.9	3.44	3.0	2.47	9.3	4.50

Table 10 各志望職業群の学部別内訳 (男子大学生)

	機械技術	研究開発	教員	営業	経理
文学部		1	27		
社会学部			9	2	3
経済学部			15	8	4
法学部			3		
商業部			7	3	3
理学部		12	13	1	
工学部	26	42	15	4	1
農学部		13	4		
外国語学部		1	2	1	
経営学部			17	5	12
合計	26	69	112	24	23

Table 11 領域別総合得点による分散分析結果

Table 11-(1) 現実的領域の分散分析結果

	SS	df	MS	F
職業差	1951.71	4	487.93	31.875***
個人差	3811.52	249	5.31	
全体	5763.23	253		

Table 11-(2) 研究的領域の分散分析結果

	SS	df	MS	F
職業差	1102.18	4	275.55	19.771***
個人差	3470.31	249	13.94	
全体	4572.49	253		

次に、大学生について分析する。大学生は、数量的に各志望職業群がまとまっているために、tab. 11の通り、分散分析 (F検定) による検討を加えた。

機械技術職志望群——現実的領域は他の4群より有意に高い (P<.001)。

研究開発職志望群——研究的領域は他の4群より有意に高い (P<.001)。

青年の職業行動に関する研究

教員志望群——社会的領域が他の4群より高い (P<.001)。

営業職志望群——企業的領域は他の4群より有意に高くなっている (P<.001)。

経理計算職志望群——慣習的領域が、他の4群より高い (P<.001)。

その結果、機械技術群は、高校生と同様、現実的領域に特徴があり、慣習的領域は5群間で最も低い値を示している。研究開発群が研究的領域が他の群より優れ、現実的領域も教員、営業、経理職より高いが、機械技術群より低い。教員群は社会的領域に特徴がみられ、営業職群は企業的が、経理職群は慣習的領域が4群より高い。

Table 11-(3) 芸術的領域の分散分析結果

	SS	df	MS	F
職業差	143.42	4	35.85	2.950*
個人差	3026.09	249	12.15	
全体	3169.51	253		

Table 11-(5) 企業的領域の分散分析結果

	SS	df	MS	F
職業差	633.03	4	158.26	18.236***
個人差	2160.91	249	8.68	
全体	2793.94	253		

Table 11-(4) 社会的領域の分散分析結果

	SS	df	MS	F
職業差	1127.11	4	281.78	30.025***
個人差	2336.82	249	9.38	
全体	3463.93	253		

Table 11-(6) 慣習的領域の分散分析結果

	SS	df	MS	F
職業差	908.27	4	227.07	23.600***
個人差	2395.75	249	9.62	
全体	3304.02	253		

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

Table 12 各志望職業群の1stコード
(男子大学生)

	R	I	A	S	E	C	合計
機械技術	24		2	1			27
研究開発	31	36	4	3		2	76
教員	18	28	8	51	6	12	123
営業	7	2	6	4	6	1	26
経理	2	3	2	1	2	13	23

また、各志望職業群の SDS 総合コードの1stコードを分析すると tab. 12の通りである。表からして、機械技術群は現実的領域が、研究開発群は研究的、現実的領域にきわだった特徴がある。また、教員群は社会的領域が半数弱を占め、次に多い領域は研究的領域である。営業職群は、現実的、芸術的、企業的がほぼ同じ割合で1stコードにあげられるため5群のなかでの特色が最も弱い。最後に、経理職群は慣習的領域に強い特徴がみられる。

以上からして、各志望職業群より、それぞれ特有な SDS パターンの存在が認められ、志望職業が示す環境モデルと SDS 結果のパーソナリティ・タイプの対応が本研究から明らかになった。

次に、高校生と大学生との年齢による発達の变化をみると、5つの志望職業全般については、研究的領域が大学生の方が高い得点を示している。また、高校生の6領域の得点の差(最

青年の職業行動に関する研究

高得点と最低得点の差)を大学生と比較すると、高校生の方が教員志望群を除き、その差が小さい。すなわち、逆に大学生の方が大きいことは、各志望職業の6領域と得点が年齢の経過とともに明確化していることを裏付けている。当然のことながら、志望職業を具体的に表明しなかったもの(未定者)は、高校生が266/877名中で30.3%、大学生が103/1042名中で9.9%を示し、高校生の方が多い。したがって、未定者による分析からも、年齢の経過にあいまって志望職業の明確化が明らかである。

要 約

高校生は、男子877名、女子665名、計1542名、大学生は、男子1042名、女子745名、計1787名にホルランドの SDS 調査票を実施し、同テストの下位尺度並びに総合得点について分析したが、その結果は次の通りである。

1). SDS 結果には、男女間に有意な差異がみられる。すなわち、高校生、大学生ともに男子は、現実的領域、研究的領域、企業的領域が女子より優れている。

一方、女子は、芸術的領域、社会的領域、慣習的領域が男子より優れている。

2). 高校生の場合は学科により、大学生は学部により、独特のパーソナリティ・パターンを示す傾向が認められた。

男子高校生：4学科のうち、普通科が研究的領域に特徴がみられ、最も高い。商業科は慣習的領域に、工業科、農業科は現実的領域に特色がある。

女子高校生：普通科と商業科との間に大きな差異が認められた。すなわち、企業的、慣習的領域は商業科の方が得点が高いのに対して、研究的、芸術的、社会的領域は、普通科の方が優れている。

全般に、普通、農業、被服、保育にみられる女子の SDS パターンは似かよった傾向を示す。

男子大学生：文学部、社会学部、法学部、経済学部の学生は、芸術的領域、社会的領域が高く、理学部、農学部、農学部の学生は研究的領域が高い。また、工学部の学生は、現実的領域に強い特徴がみられる。

女子大学生：文学部と社会学部のパターンが極めて似かよっている。すなわち、社会的、芸術的領域が高く、現実的領域が極めて低いのが目立つ。しかし、同じ文科系の学部である経営学部(経済をも含む)のパターンは、慣習的領域が第1位にランクされ、女子の文学部、社会学部や男子の経済学部と異なる傾向を示す。

3). 志望職業により、独特のパーソナリティ・パターンを示す傾向がみられた。

特に、男子大学生による分散分析の検討で明確な結果が得られた。

例えば、機械技術職(自動車整備士)志望群は、現実的領域、経理計算職志望群は、慣習的領域にすぐれていることなどである。

〈Appendix〉

〈志望職業について〉

あなたが、将来（近いうちに）つこうとする職業（仕事）について、希望順に3つあげてください。単に、「会社員」、「公務員」などを書くだけでなく、その内容をできる限り詳しく書いて下さい。

第1希望 _____

第2希望 _____

第3希望 _____

〈仕事のさまざまな活動的な側面について〉

次に、仕事に関する様々な活動があげてあります。それらの活動について、あなたの好みを判断して、することを好む場合は、数字に○印、反対に好まない、関心がない活動は×印を例のように入れて下さい。

例 ⑤…………… ×……………

A

1. 電気に関するものを調整、修繕すること。
2. 車（自動車、単車、自転車）を修理すること。
3. 機械に関するものを調整、修繕すること。
4. 木（材木）を使ってものを作ること。
5. 自動車あるいはトラックなど車を運転すること。
6. 金属機械の道具・器具を使用すること。（例えばドリルなど）
7. 自動車や単車を使って仕事をする事。
8. 製造コース（溶接、せん盤など）に進むこと。
9. 製図・トレースコースに進むこと。
10. 木工・土木コースに進むこと。
11. 自動車・機械整備コースをとること。

B

1. 科学的な本や雑誌をよむこと。
2. 研究所（室）で仕事をする事。
3. 新しい研究、だれも手がけていない分野を開拓すること。
4. 果物など品種改良し新しいもの（食物）を作ること。
5. 物質（例えば、水や土）の成分をしらべること。
6. 食物あるいは食品を栄養学的に考えてみる事。

青年の職業行動に関する研究

7. 難しいパズルをとくこと。
8. 物理のコースを歩むこと。
9. 化学のコースを歩むこと。
10. 幾何のコースを歩むこと。
11. 生物のコースを歩むこと。

C

1. スケッチや絵をかくこと。
2. 演劇（芝居）や絵画を見に行くこと。
3. 建物、調度品、家具などを設計したり、室内を装飾すること。
4. オーケストラやバンドに出演すること。
5. 楽器を使って練習すること。
6. リサイタル、コンサート、ミュージカルに行くこと。
7. 文学的作品や流行小説を読むこと。
8. 肖像あるいは写真を作りあげること。
9. 演劇ものをよむこと。
10. 詩を書いたり、読んだりすること。
11. 芸術（美術・音楽など）コースを歩むこと。

D

1. 友人に手紙を書くこと。
2. 宗教活動に参加すること。
3. 地域の社会的なクラブ（青年会）や会社内のクラブに参加すること。
4. 個人的な悩みなどで相談を受け、人を援助すること。
5. 子供の世話をすること。
6. パーティに行くこと。
7. ハイキングに皆人と一緒に出かけること。
8. 友人と一緒に遊んだり話したりすること。
9. クラス会、同窓会に参加すること。
10. スポーツ行事に参加すること。
11. 新しい友達を作ること。

E

1. 人に影響を与えること。

青年の職業行動に関する研究

2. もの（品物）を売ること。
3. 政治について議論すること。
4. 自分で事業をすること。
5. 会議に参加すること。
6. 人に話を聞かせること。
7. ある団体の役員として勤めること。
8. 他の人の仕事を指導、監督すること。
9. 会議でみんなの意見をまとめて、わかりやすく報告すること。
10. ある目標を到達するためにグループを導くこと。
11. 政治運動に参加すること。

F

1. 机や部屋を整然としておくこと。
2. 手紙あるいは書類を書いたり、ととのえること。
3. 事務や簿記の上で加減乗除すること。
4. いろいろな事務機械を操作すること。
5. 支出の記録を詳細に記入し、保管しておくこと。
5. タイプ修得のためのコースをとること。
7. 実務コース（そろばん、文書事務、商業英語など）をとること。
8. 商業・簿記コースをとること。
9. 秘書コースをとること。
10. 手紙、報告書、記録などを収録すること。
11. 商取引の手紙を作成すること。

<職業興味について>

次に多くの職業（仕事）があげてあります。1つずつよく読んであなたにとって、それが関心がある、興味をもつ仕事であれば○印を、あまり好まない、関心がないものであれば×印を所定の欄に記入下さい。

回答は、必ず○、×のいずれかを記入して下さい。

飛行機整備士

動植物の飼育・栽培係

発電所機械操作員

電気・水道・ガス工事作業員

土木用ショベル機械操作員

測量技師

工事現場監督者

無線電信技術者

ガソリンスタンド従事者

青年の職業行動に関する研究

庭 師

工具デザイナー

電車運転士

写真製版工

電 気 工

気象学者

生物学者

天文学者

航空機設計技師

人類学者

動物学者

化学者

研究所助手

医 師

臨床検査技師

地質学者

植物学者

パイロット (飛行機操縦士)

物理学者

詩 人

オーケストラ指揮者

ピアニスト・バイオリニスト (音楽家)

作 家

商業デザイナー

フリー作家

編 曲 家

美 術 商

映画監督

声 楽 家

作 曲 家

舞台演出家 (ディレクター)

脚 本 家

漫 画 家

宗 教 家

高 校 教 員

青少年補導員

養護施設職員

結婚カウンセラー

体育の先生

看護婦 (士)

臨床心理学者

社会科教師

勤労青少年ホーム所長

中学校教頭

カウンセラー

ケースワーカー

職業カウンセラー

ラジオ・テレビアナウンサー

商品仕入係

証券会社セールスマン

工場長あるいは支店長

テレビプロデューサー

ホテル支配人

会社経営者

レストラン (食堂) 経営者

生命保険外交員

旅行会社営業係

不動産営業セールスマン

経営コンサルタント

スポーツ用品販売係

知事、市長、議員 (国会、市町村)

本店屋員

品質管理責任者

秘 書

青年の職業行動に関する研究

売上げ勘定係
統計業務員
タイピスト
銀行出納係
税務署員
在庫品管理係

電算機設備操作員
計理事務係
火災・交通事故保険鑑定人
給与支払事務係
銀行審査係

<仕事に対する自己の能力の可能性について>

次に、仕事に関する様々な活動があげてあります。その中であなたができる。或いは少しでもこなせる活動については、数字に○印を、反対にすることが難しいものには×印を入れて下さい。

例 ③…………… ×……………

A

1. 電気ドリルや電気のこぎり（日曜大工として市販されている）を使うことができる。
2. 電気スタンドや換気扇などの家庭の簡単な電気器具を修理できる。
3. 自動車の機械の調整ができる。
4. カメラや映写機の操作ができる。
5. 木を使って小ぎれいな棚・箱などを作ることができる。
6. 青写真をよむことができる。
7. ヒューズやプラグに取付けができる。
8. ドアの取っ手（ノブ）やちようつがいの修理・取付けができる。
9. 家の設計を考え、簡単な製図ができる。
10. ラジオ・テレビの簡単な修理やアンプの真空管の取付けができる。
11. 水道のパッキングの修理ができる。

B

1. 真空管やトランジスタの働きについて理解している。
2. たんぱく質を多く含んだ食物をあげることができる。
3. ウランについて簡単な説明ができる。
4. 種子の発育状況の観察をする。
5. 天気図をみて明日の天気予測をする。
6. 顕微鏡を使って微生物を観察する。
7. 星座（例えば北斗七星）をみつけることができる。
8. 白血球の役割が述べられる。
9. 簡単な化学式（ $2\text{H}_2 + \text{O}_2 = 2\text{H}_2\text{O}$ ）を説明することができる。

青年の職業行動に関する研究

10. 気象衛星について簡単な説明ができる。
11. 科学的な催し物（見本市）、或いは科学博物館によくでかける。

C

1. 楽器（ギター、ハーモニカ、ピアノなど）を演奏することができる。
2. 2部或いは3部合唱に参加することができる。
3. 独唱者（あらゆる分野の歌手をさす）として歌うことができる。
4. 劇などに出演できる。
5. 簡単な曲を作ってみることができる。
6. 舞踊（社交ダンス、フォークダンス、民謡など）ができる。
7. 人物をスケッチできる。
8. 彫刻や版画ができる。
9. 陶器を作ることができる。
10. 洋服・ポスターなどのデザインができる。
11. 小説や詩を作ってみることができる。

D

1. いろいろなことを人に説明するのが得意である。
2. 社会福祉の活動（ボランティア活動など）に参加する。
3. みんなと一緒に仲よく仕事をする。
4. 目上の人のもてなしをする能力をもっている。
5. 会場の雰囲気になごやかにする能力がある。
6. 子供たちを楽しく教えることができる。
7. パーティのプログラムを計画することができる。
8. 困った人、悩んでいる人の相談相手ができる。
9. 病院や家庭の奉仕員（ヘルパー）として働くことができる。
10. P T A やサークル活動での催し物や会合の計画ができる。
11. 人の相談にのるにふさわしい人柄をもちあわせている。

E

1. 学校で級長、その他クラス委員、また、クラブ、サークルでの役員に選ばれたことがある。
2. 1人ひとりを正しくみて、仕事の上で部下を指導、監督できる。
3. 非常にエネルギッシュで、バイタリティをもちあわせている。
4. 自分のやり方で人を使っていくのがうまい。

青年の職業行動に関する研究

5. 営業販売（品物を売る）をする能力がある。
6. みんなの代表として、学校や会社などで発表したことがある。
7. セールスマン、或いはリーダーとしての能力がある。
8. サークルやグループを作ったり、また人をまとめていくことがうまい。
9. 事業（会社経営）をする能力がある。
10. 商品の仕入計画や新しい商品企画をする。
11. 討論するのがうまい。

F

1. タイプ（和文、英文、カナ、テレタイプ）ができる。
2. 複写機や簡単な印刷機（輪転機）を使うことができる。
3. きまったやり方で資料を整理し記録する。
4. 文章や書類の整理保存ができる。
5. 机にむかって、事務作業の処理ができる。
6. そろばんを使うことができる。
7. 短い時間に多くの文字がかかる。
8. 電子卓上計算機を使うことができる。
9. キーパンチのような簡単なデータの作成ができる。
10. 簿記ができる。
11. 売上げ、支払いの伝票を作り、整理記録することができる。

<能力の自己評価について>

次にあげてあるさまざまな特性について、あなたが自分を出来るだけ正確にみつめて、ふさわしいと思う段階の数字を○印でもってかこみなさい。

ただし、6つの特性で同じ段階の数字——順位が同一——があるならば、必ず順位が異なるようにもう一度やり直して下さい。

評 価 1

	機 械 に 関 す る 能 力	科 学 的 な 能 力	芸 術 的 な 能 力	教 え る こ と の 能 力	営 業 販 売 (もの を 売 る) の 能 力	書 く (文章を 正 確 に 早 く 書 く) 能 力
高 い	7	7	7	7	7	7
	6	6	6	6	6	6
	5	5	5	5	5	5
平 均	4	4	4	4	4	4
	3	3	3	3	3	3
	2	2	2	2	2	2
低 い	1	1	1	1	1	1

青年の職業行動に関する研究

評 価 2

	手腕の技術 に関する 能 力	計算や応用 問題を推理 しとく能力	音 楽 に 関 する 能 力	人 と 協 力 して 仕事 を する 能 力	人 や 仕 事 を 管 理 す る 能 力	事 務 能 力
高 い	7	7	7	7	7	7
	6	6	6	6	6	6
	5	5	5	5	5	5
平 均	4	4	4	4	4	4
	3	3	3	3	3	3
	2	2	2	2	2	2
低 い	1	1	1	1	1	1

文 献

- Crites, J. O. 1969 Vocational Psychology. New York: McGraw-Hill.
- Hervey, D. W., Whinfield, R. W. 1973 Extending Holland's Theory to Adult Women Journal of Vocational Behavior, 3, 115~127.
- 広井甫・中西信男著 1978 学校進路指導 誠信書房
- 広井甫・返田健 1971 人格類型と希望職業 日本教育心理学会 第13回総会 発表論文集
- Holland, J. L. 1973 Making Vocational Choices: a theory of careers. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Holland, J. L. 1972 The self-directed search. Palo Alto, Calif.: Consulting Psychologists Press.
- 増田幸一・伊藤博共編 1978 進路指導 創元社
- 道脇正夫 1972 職業に対する興味と自信に関する一考察 適性研究 第7号 新職業適性研究会
- 森下高治 1977 女子職業志望者の職業選択に関する一研究——ホルランドの SDS (1970) を用いて——日本心理学会第41回大会発表論文集
- 森下高治・武田正信 1979 職業行動に関する研究——高校生を中心として——日本応用心理学会第46回大会発表論文集
- 森下高治・武田正信 1979 職業行動に関する研究——大学生を中心として——日本心理学会第43回大会発表論文集
- Super, D. E., Bohn, M. J. 1971 Occupational Psychology. London: Tavistock.
- 職業研究所編 1972 職業レディネス・テスト手引 雇用問題研究会
- 職業研究所編 1974 職業レディネス・テスト活用の指針 雇用問題研究会
- 田村鍾次郎 1978 アメリカにおける進路指導とキャリア教育 国立教育研究所
- 柳井晴夫 1967 適性診断における診断方式の検討: 1 教育心理学研究 第15巻 第3号 p. 145-160

末筆ながら本稿作成にあたり、関西学院大学文学部教授武田正信先生から、有益な御教示を賜ったことを記して感謝の意を表します。

また、電子計算機処理によるプログラム面では、関西学院大学情報処理研究センター雄山真弓氏に、データ整理では文学部小串三和子氏に大変お世話になりました。ここに深謝の意を表します。